

草花あそび

菅野 忠彦*

はじめに

子どもたちが、校庭や校外に出かけ、草花に接したとき、「おもしろそうだな、やってみたいな」という気持ちを持たせるためには、草花を使って何が出来るかを知っておく必要がある。子どもたちの、「やってみたい」という気持ちを持たせるためのヒントとして身近にある草花を使った遊びを集めてみた。

○ オオバコ (図1)

大葉子の意味で、広い葉にちなんで、つけられた。

1 花穂のひっぱりすもう

- ①花穂のくきをからみあわせてひっぱり。(図2)
- ②切れたほうが負け。

2 葉の三味線。(図3)

- ①つめできずをつける。
- ②きずをつけた所を折りまげて、しずかに両側にひっぱり。
※このほかに
「すじ何本?」と、残ったすじの数をあてあうこともできる。

3 葉のまり

- ①オオバコの葉を、たくさん集めて、葉のつけねを糸でかたくしばる。(しばった糸は余分に残す)
- ②同じものを2つ作り、残した糸でしばり合わせる。
- ③葉を少しずつひっぱり、ボールの形にととのえる。

○ タンポポ (図4)

タンポポの語源は、おそらくタンポ穂の意で、球形の果実穂から、タンポ(布で綿をくるんで丸めたもの、拓本などに使う)を想像したものであろうといわれている。

1 ネックレス

- ①花をたくさん集めて、糸を通してつなぐ。
(サクラの花びらなどでもできる)

2 指輪・うでどけい (図5)

- ①花のすぐ下に、つめでさけめを入れる。
- ②くきを輪にして、さけめにいれる。
※くきが長いと、うでどけいに、くきが短いと、指輪となる。

3 吹き玉(水車) (図6)

- ①花のくきを2cmぐらいまで切る。
- ②水につけると、わったところがそり返る。
- ③ハルジオンなどの小さいつぼみをのせて、吹きあげる。
※両端に切り込みを入れて水につけたあと、細い棒を通すと水車になる。

4 笛

- ①花のくきを2~3cmに切り取る。
- ②くきの口に入れた方を少しつぶして吹くと音が出る。

○ ナズナ(ペンペン草) (図7)

撫菜(ナデナ)の意味で愛(メ)ズル菜の意味と思われる。ペンペン草は、果実の形が、三味線のバチに似ているからである。

1 すず (図8)

- ①下の実からじゅんにつまんで、すこしだけひっぱり実をさげる。
- ②上の方まで実をさげていく。
- ③耳のそばで静かにふる。

○ スギナ (ツクシ) (図9)

杉菜とは、その形状が杉に似ていることによる。昔からツクシを土筆と書くのは日本名であり、中国では筆頭菜という。

1 どこからとった? (図10)

- ①スギナもツクシも、くきの一部を抜く。
- ②抜いたところを、もとにもどす。
- ③どこがとれているかをあてっとする。

○ オオイヌノフグリ (図11)

犬のフグリで、果実の形からいわれ、イヌノフグリよりも、大形の種子を持つ。

1 落ちないよ

- ①花のついた枝を手を持って、そのまま走る。花が落ちたら負けになる。

○ アズマネザサ (図12)

アズマネザサは、東根笹と書き、関西のネザサに対して東日本にもっとも普通に見られるからいう。アズマシノともいうのは、篠竹として使われたことによる。

タケとササの違いは、あまりはっきりしていません。人によっては、幹の使えるものがタケで、葉の使えるのがササだという人もいます。一般には、大形のものをタケ、小形のものをササと呼びますが、どこまでがタケで、どこまでがササなのか区別に困ります。そこで、竹の子についている皮が、大きくなるにつれて、ついてた皮がとれるものをタケ、竹の子の皮が腐るまで残るものをササと呼んでいます。

1 笹舟

なるべく大きめの葉を使った方が作りやすい。

- ①おる (図13)
- ②3つにさく (図14)
- ③さいた両はしをくみ合わせ (図15)

④反対側も、同じようにする (図16)

※いろいろな笹舟 (図17)

あしの葉で作ると、長い舟ができる。

葉の切れめにさし込む (図18)

笹の葉の軸を長めにとり、軸に、やわらかい葉をさす。 (図19)

2 アメ

葉の先の方から三角におっていく。始めのおり方が正三角形になるようにすると形がととのう。 (図20)

ねもと近くまでおったら、柄をさし込む。(図21) できあがり。 (図22)

3 カメ

①ササの新芽を使う。 (図23)

②糸でしばる。

③たがいちがいに、新芽をさし込んでいく。(図24)

④つめなどで、よぶんな所をとって、形をとのえてつくる。 (図25)

○ エノコログサ (図26)

(ネコジャラシ)

エノコロ草は、犬の子草の意味で、この穂が、子犬の尾に似ているからいう。猫じゃらしは、この穂で、子猫をじゃれさすからいう。

1 ひげ (図27)

①穂をねもとから2つにさく。

②さきのほうを少しだけ残して鼻の下にはさみこむ。

③口をとがらせて、落ちないようにする。

○ チカラシバ (図28)

(ミチシバ)

力芝の意味で、この草は土にしっかりと根はえるので力強く引いても容易に抜けないのでこういう。

また、路芝は、路傍に多いのでいう。

※エノコログサとチカラシバは似ているので、以下の遊びは、どちらを使ってもできる。

2 競馬

①くきをまげて、うまをつくる (図29)

②ねもとを少し残して、むちを作る。

③たいらな所に馬をおいて、むちでこすると、前へ進む(図30)

3 毛虫

- ①エノコログサの穂を取る。
- ②穂先を上に向けて、かるく手の中に入れてにぎる。
- ③かるく、こまかく、つよく、よわく動かすと、かくれていた毛虫が、ひとりでに出てくる。

○ オヒシバ

(チカラクサ)

雄日芝は、雌に対してその大形の草状に基づいての呼名で、ヒシバとは、夏の暑い日にかかわらず盛んに繁茂することによる。力草は、その根が強く抜き難いのでいわれる。

1 すもう

- ①穂先を切りそろえる。
- ②10cmくらいの長さにする。(図32)
- ③ダンボールの上などで、紙ずもうのようにトントンたたいてすもうをとる。

2 かんざし

- ①穂を下にひっぱり、ブラブラさせて、髪にさす。(図33)

3 ひっぱりずもう

※オヒシバでも、メヒシバでも同じようにしてやることができる。

○ メヒシバ(図34)

雌日芝は、雄日芝に対しての呼名で、雄日芝に対して、一見弱そうなのでこう呼ばれるが、この草は茎の節目より根を下して、非常に抜きにくくなる。

- ①図35のようにむすぶ。
- ②矢印の中に、もう1本を入れて、ひっぱり合う。
- ③切れると取けになる。

1 かさ(図36)

- ①穂の1本ずつを下におり返し、穂のなかの1本でかるくしばる。
- ②しばった所を、かるくつまんで、くきを上下に動かすと、かさがとじたり、ひらいたりする。

○ カヤツリグサ(図37)

蚊帳釣草の意味で、2人の子供が互いに茎を両端から裂くと4本に分かれて四角となるので、この遊びを蚊帳をつるのに模してこの名がついた。

- ①カヤツリグサの茎を使う。
- ②両方の切り口をちがえて、両はしからゆっくりさいていく。
- ③2人で持って、それぞれの切り口を開いていくと四角になる。(図38)

○ クズ(図39)

クズは、クズカズラの省略であるという。一説にはクズは、大和の国栖(クズ)であり、昔、国栖の人が葛粉を作って売りに来たので、自然にクズというようになったといわれる。

クズは豆科のつる状の草で、全株にあらい褐色の毛がはえている。

1 音出し(若い葉を使う方がやすい)

- ①片方の手の指を、親指と他の指とで丸く輪を作り、その上にクズの葉を置いて、指の丸い輪の中心あたりの使の葉を少しくぼませて、もう一方の手で葉をたたくと、葉が破れる時に音が出る。
- ②片方の手の指を、親指と他の指とで丸く輪を作り輪の下からクズの葉をさし込んで、もう一方の手で、下からたたくと、そのいきおいで、葉が上に飛び音が出る。

2 かんむり(むかで)葉柄を使う

- ①葉をちぎり取って茎を使う。(図40)
- ②どんどんつなげていく。(図41)
- ③おわりに、はじめの所とくっつけて輪にする。
※むかでは、かんむりの作り方で、足と足の間をあけて作り、輪にはしない。

3 おみこし(葉柄を使う)

- ①1本の茎をはさんでおりまげる。(図42)
- ②おりまげた茎の両側に下から2本の茎ではさみ、上からおりまげる。(図43)
- ③また、つぎの茎をおりまげる。(図44)
- ④同じようにして、9~10回つづけて、下をしばってきりそろえると、できあがる。

○ ジュズダマ (図 45)

数珠玉の意味

果実が成熟すると、黒色から灰白色となるので、この時に採取する。

この果実を図のように糸を通してつなげて数珠を作る。(図 46)

○ ススキ (カヤ) (図 47)

ススキは、すくすく立つ草の意ともいわれ、また、神楽に用いる鳴物用の木、すなわちスズの木の意味ともいわれる。また、カヤは、刈って屋根をふくの意であろうともいわれる。

1 葉のロケット (矢)

- ①手を切らないように、葉のふちのザラザラしたところをほそくさいとる。(図 48)
- ②しんにそって途中までさいておく。(図 49)
- ③矢の羽根は、しんを残して切り込みを入れる。
- ④下にすばやくひっぱると、矢が飛ぶ。(図 50)

2 葉のふえ

- ①ススキの葉を 3 cm ~ 5 cm の長さに細く切る。(図 51)
- ②切った葉をたるませないように親指と親指の間はさむ。
- ③親指と親指の間を強く吹くと音が出る。

3 葉のこま

- ①2つおりの葉を、4枚くみあわせる。(図 53)
- ②まん中に、せっしゃくざいをつけたようじを入れて葉をひっぱる。(図 54)
- ③長さを同じにきりそろえる。

4 葉のしき物

- ①葉を 7 ~ 8 枚たてにならべる。(図 55)
※はしに板をのせ、その上にとってやると葉が動かなくてやりやすい。
- ②ならべた葉を 1 本おきにもちあげ、その間にべつの葉を 1 枚よこに入れて、手前によせる。(図 56)
- ③つぎに、下になった葉をもち上げて、また葉を入れる。これを、たての葉の数だけくりかえす。
- ④四すみの葉をおりかえす。(図 57)
- ⑤まわりの葉をきりそろえてできあがる。

5 花穂を使ったはり絵

(ネコ、イヌ、ウサギ、ヒヨコ等の絵)

- ①ススキの毛 (花穂) を指でしごいて集める。
- ②色画用紙にクレヨンで絵を描く。
(毛をつける所は、色をぬらない)
- ③毛をつけたい所にのりをつける。
- ④のりが、かわかないうちに、ススキの毛をふりかける。
- ⑤かるく手でおさえる。
- ⑥よぶんな毛をはらいおとす。

※ススキの花穂だけでなく、タンポポ、チカラシバ等の毛を使ってみるのもよいと思います。

○ シロツメクサ (図 58)

はじめ和蘭ゲンゲと名づけ、後に詰め草と名づけ、現在では白詰草という。昔オランダ人が、ガラス器具、を箱に入れ、その空隙に本種の枯草を詰めて長崎に運んで来た。その時、枯草についていた種子から、日本に広まったといわれる。

1 花のかんむり (ネックレス)

- ①まず、2 ~ 3 本の花に、べつの花をからませる。(図 59)
- ②おなじようにして、つぎつぎからめていく。(図 60)
- ③ながくになったら、さいしょのところとつなぐ。(図 61)
- ④長くつくれば、ネックレスになります。(図 62)

2 葉つなぎ

- ①くきに、つめでさけめをいれる。
- ②べつのくきを、さけめにさしこむ。(図 63)

○ ゲンゲ (レンゲソウ) (図 65)

蓮華草は、花が輪状に並んでつく様子を、ハスの花に見たてたもの。

1 花のかんむり

シロツメクサと同じようにつくる。

2 花つなぎ

- ①くきに、つめでさけめをいれる。(図 66)
- ②べつのくきをさけめにさしこむ。(図 67)

3 めがね

①花のすぐ下に、つめで、さけめをいれる。

(図 68)

②2本つくり、べつのくきをさけめにとおす。

(図 69)

4 かざぐるま

①花びらを、5～6枚にへらす。(図 70)

②くきを1cmぐらいにきる。

③タンポポのくきをとり、そこにレンゲソウの花をさして、ふいてまわす。(図 71)

○ スズメのテッポウ (図 72)

(スズメノマクラ) (ヤリクサ)

雀の鉄砲は、小形で円柱状の花穂を、雀の使う鉄砲になぞられたもの。

1 ふえ

①ほを、ひきぬく。(図 73)

②ほを、おりかえしてかるくつまんで、ふく。

(図 74)

○ カラスノエンドウ (図 75)

鳥野豌豆にくらべて、花葉豆果が大形であるためであり、豆果が黒く熟するのをもまたカラスの名にふさわしい。

1 笛

①へたをきりとる。(図 76)

②ひらいて、中のたねをとる。(図 77)

③もとのかたちにもどして、かるくふく。(図 78)

○ マサキ (図 79)

マサオキ (真青木) のつまったものか、マセキ (籬木) の転じたものといわれるが、はたしてそうかは、不明である。

1 笛

①はの先の方から、くるくるとまいていく。(図 80)

②ふくところを、歯でおしつぶしてから、ふく。

(図 81)

○ アシ (ヨシ) (図 82)

アシは、桿 (はし) の変化したものであろう。これをヨシというのは、アシが (悪し) に通ずるので、

これを嫌ったからである。

1 笛

①ふくところに使う葉は、わかい葉を使う。(図 83)

②葉の先のほうから、すこしななめにまいていく。(図 84)

③大きい笛にするときには、べつの葉を、中にかさねてまいていく。(図 85)

④まきおわりは、すこしのこして、うちがわに、おりこむ。(図 86)

⑤ふくところを、歯でつぶしてからふく。

○ ノカンゾウ (図 87)

野萱草、山野に野生するからいう。八重咲の藪萱草は、藪にはえるため、ノカンゾウよりも、人の集落に近く生ずることを、うまく表現している。

1 笛

①葉の根本の方のVになったところを、5～6cmにきりとる。(図 88)

②両はしを、かるくつまんで、いきをすって音を出す。(図 89)

※これはヤブカンゾウでも同じようにできる。

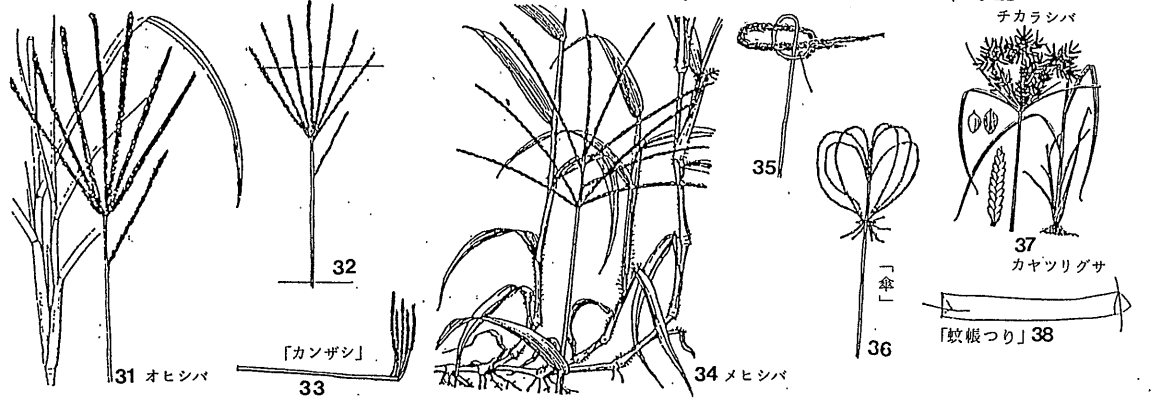
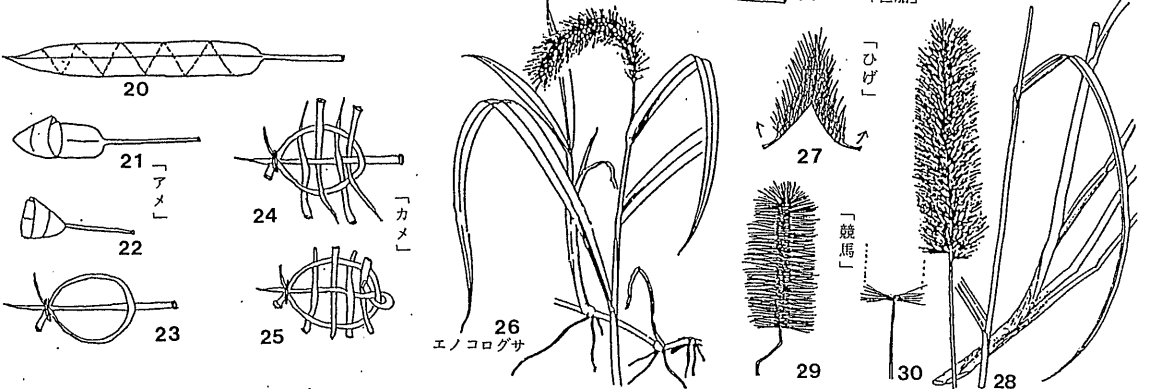
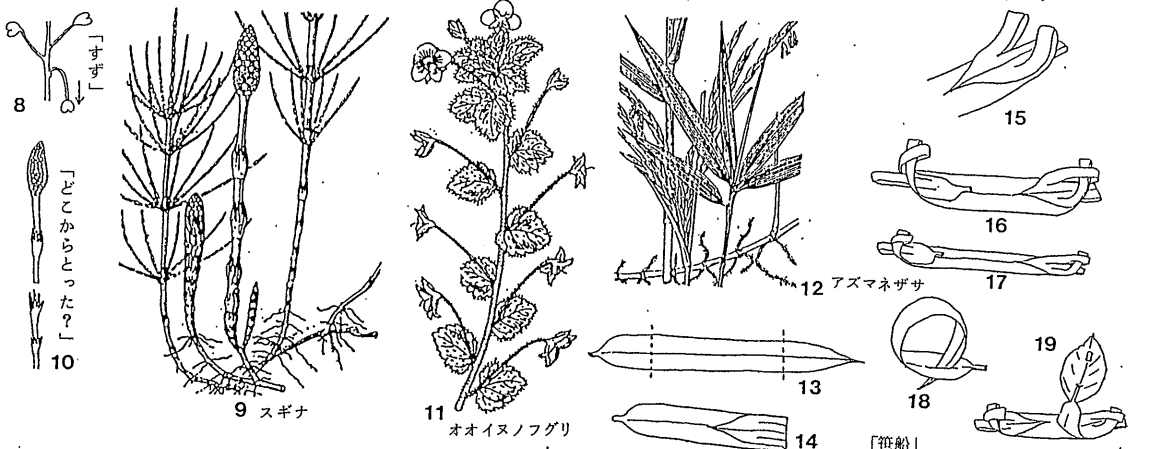
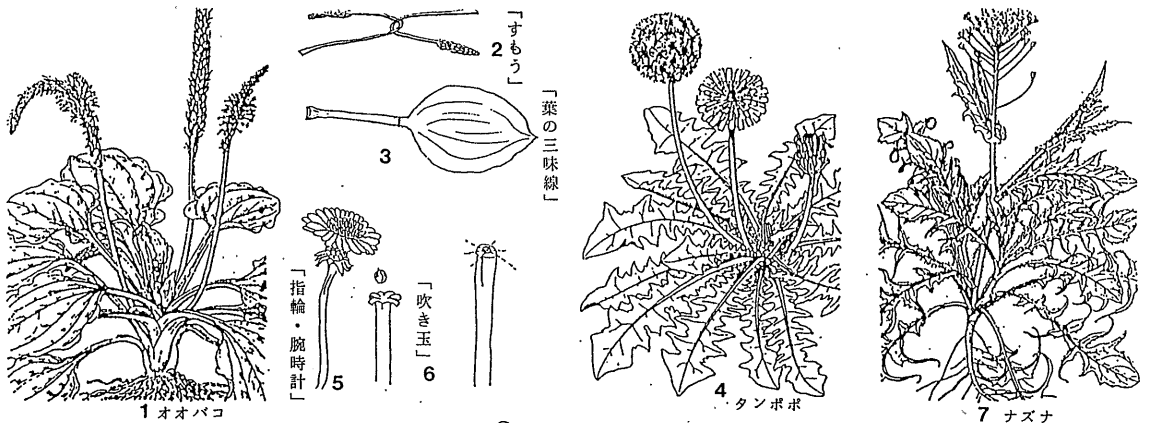
おわりに

身近に手に入る植物で、簡単にできる遊びを集めてみた。最近では、手に入る植物が少なくなって、草花遊びができないといわれている。しかし、よく調べてみると、けっこう材料は集まるものである。

ここにあげた遊びのほかにも、秋に草の実を衣服につけて遊ぶこともできるであろう。身近な植物に相手をしてもらって遊ぶことをおすすめしたい。

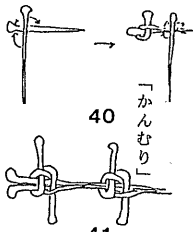
参考文献

牧野富太郎著 牧野、新日本植物図鑑。北隆館

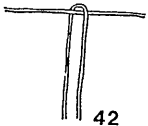




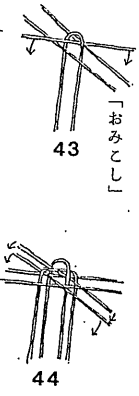
39 クズ



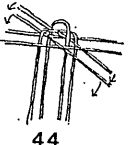
40 「かんむり」



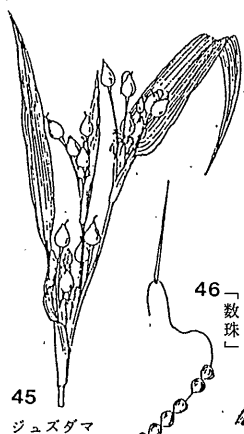
41



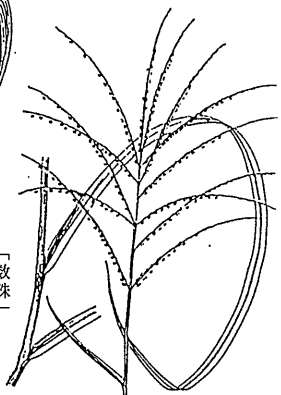
43 「おみこし」



44



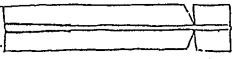
45 ジュズダマ



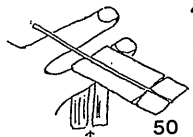
47 ススキ



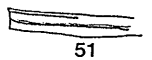
48



49 「葉のロケット」



50



51

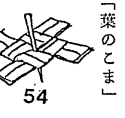


「葉のふえ」

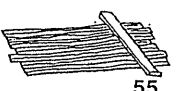
52



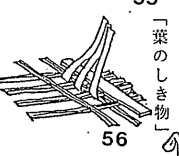
53 「葉のこま」



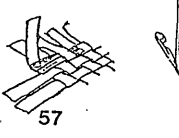
54



55 「葉のしき物」



56



57



58 シロツメクサ

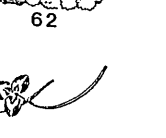


「葉のかんむり」

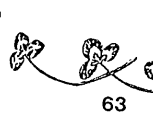
60



61

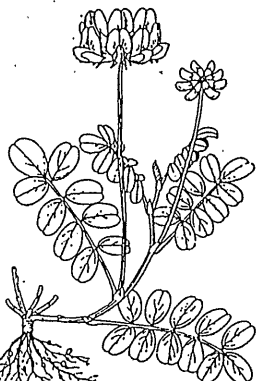


62

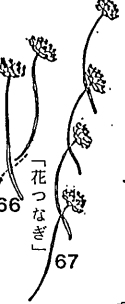


「葉のつなぎ」

63



65 ゲンゲ

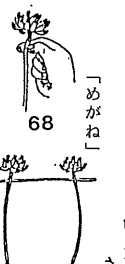


「花つなぎ」

66



67



「めがね」

68



69



「かざぐるま」

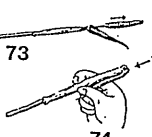
70



71



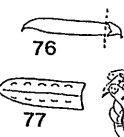
72 スズメノテッポウ



73



74



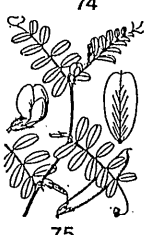
76



77



78



75 カラスノエンドウ



79 マサキ



80 「笛」



81



82 アシ



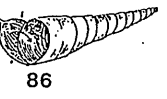
83 「笛」



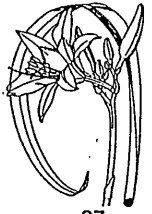
84



85



86



87 ノカンゾウ



88 「笛」



89